ヨハネによる手紙第一5章1－3節 「同じ神から生まれた者」

1A 神から生まれた者 1－2

1B イエスをキリストと信じる信仰 1

2B 神への愛 2

2A 重荷とはならない命令 3

本文

ヨハネによる手紙第一 5 章を開いてください。今晩は、5 章 1-3 節から見ていきます。「1 イエスがキリストであると信じる者はみな、神から生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します。2 このことから分かるように、神を愛し、その命令を守るときはいつでも、私たちは神の子どもたちを愛するのです。3 神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。」前回私たちは、神を愛しているということについて見ていきました。4 章 19-21 節です。神を愛しているのであれば、兄弟も愛するべきだと言っています。そこで、ヨハネが「兄弟」と言っているので、そこの部分をここで掘り下げます。今晩は、「同じ神から生まれた者」という主題でお話をしていきます。

1A 神から生まれた者 1－2

1B イエスをキリストと信じる信仰 1

1a イエスがキリストであると信じる者はみな、神から生まれたのです。

「神から生まれた」ということ、ヨハネは福音書の冒頭で語っていました。「1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

そのことをはっきりと教えていた逸話を、ヨハネは福音書の 3 章で教えています。パリサイ派のニコデモ、ユダヤ人の議員でもありました。イスラエル人の教師でもありました。老年にもなっています。宗教的であり、神の契約の民であり、教えられるどころか、人々を教導する人でありました。その人に対してイエス様は、「3:3 まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることができません。」その後で、もっと説明をして、「3:6 人は水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」ニコデモが神の国に入るのでなかったら、だれが入るのか？と思ってしまいますが、それは神の真実だったのです。人が罪を犯し、罪の中で死んでしまいました。しかし、神がキリストに罪を帰せて、私たちの罪をその流された血によって取り除き、御霊によって生かし

てくださいました。それで、肉によって生まれるだけでなく、御霊によっても生まれます。そうすることによって、再び神のいのちとつながることができ、神の子どもとなりました。

パウロも、ニコデモと同じように、パリサイ派で、おそらくユダヤ人の議員であり、イスラエル人の教師でありました。けれども、これらのことは「塵あくた」として退けたのです。「ピリ 3:7-8 しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。」

ここまでは、キリスト教の基礎教理として、多くの方が知っていると思います。けれども、私個人が神に生まれた者となった、霊的に生きる者となったというだけでは不十分な理解です。それは、神によって生まれたとは、神の家族の中に入ったということなのです。イエス様は、一つにされるという奥義を、ご自身が捕らえられる前に父なる神に祈られました。「ヨハ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」父のふところに永遠の昔からおられた、独り子の神であられるイエス・キリストです。この方が、父とご自身が一つであるように、彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください、と祈られました。主が天に昇られて、聖霊を遣わされ、私たちはその交わりの中に入れられました。イエスは神の独り子であられますが、その関係の中に、御霊による新生によって、養子縁組として神の家族に入れられたのです。「あなたがたは、・・子とする御霊を受けたのです。（ロマ 8:15）」子とは、養子縁組のことです。そして、「エペ 2:19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。」

私たちが地上の家族がいて、血を分け合う存在として結びついているのですが、同じように、キリストの血にあずかった者たちとして、一つの家族となっているのです。肉の家族がやって来て引き取ろうとした時に、イエス様が言われた言葉を思い出してください。「マルコ 3:34-35 そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。35 だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」自分が神に生まれたと同時に、神のことばによって生まれた他の者たちと、兄弟、姉妹、母になった、ということです。

「イエスがキリストであると信じる者はみな」とヨハネは言っています。イエスが名前で、キリストが姓ではありません。ヘブル語の「メシア」のギリシア語であり、メシアは「油注がれた者」です。王を任命する時に、また祭司を任命する時に油を注ぎます。「詩 133:2 それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。」大祭司アロンが油を注

がれています。「Ⅰサム 16:13 サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。」ダビデが王として選ばれているので、サムエルが油を注ぎました。イスラエルの民は、神から祭司の王国になると召されていましたが、彼らの頭である、大祭司であり王となられる方が、後の世に来られると信じていたのです。自分にとって、イエスが祭司となっておられ、その流された血を神に携えることによって、私たちの罪は清められました。そしてこの方が自分の主となり、王の王として世に来られると信じるようになりました。それが、イエスがキリストであると信じることです。

ここで大事なのは、「みな」という言葉ですね。神の救いへの招きは大きく広げられています。差別がありません。「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」「一人として」と強調されています。信じる者がみな、ということです。ですから、私たちの中に、特権意識があるといけませんね。キリスト教会を見まわして、いかに彼らは聖書のことが分かっていない、とか、そういた見下げた態度はいけません。では、自分こそがどこまで分かっているのか？謙虚に、冷静に見て行かないといけないでしょう。

1b 生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します。

ヨハネは既に、4 章 19 節で私たちが神を愛していることを話していました。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」神がまず愛してくださったから、私たちは愛しているのです。ここでは、その神は私たちを生んでくださったということです。父となってくださり、それゆえに愛しています。父なる神が、キリストを通して、御霊によってご自分の子どもにしてくださったのです。その関係があって、愛しています。世においては、血がつながっていても、父としてふるまっていないということはいくらでもあるでしょう。見捨ててしまう父もいます。けれども、父なる神は、事実、御子を下さるという愛を示してくださった。名実ともに父なる方なのです。

そこで、「その方から生まれた者も愛します」と言っています。同じ父から生まれています。ですから、霊的な血縁関係にいるわけです。それを神秘的に示しているのが、キリストの命じられた聖餐です。「Ⅰコリ 10:16-17 私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。17 パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。」一つの血、一つのからだにあずかっています。したがって、同じ、イエスをキリストと信じている者を憎むということは自分自身を憎むことに他ならず、キリストの御体を痛めてしまいます。

このことを忘れてしまう人たちが、信仰を持っている人々に散見され、心を痛めるし、それが世に対しては証しになっていないのです。他の伝統的な教派、正教会やカトリックにおいては教会の伝統に従っていないと、その人はもはやキリスト者ではない、救われていないとする傾向があります。

その反対にプロテスタントは、正しい教えと御霊による確信が救いにつながっているので、自分が正しいと信じていることと異なることを話している人を見ると、その人はキリストのものではないとしてしまうのです。けれども、ヨハネは、イエスをキリストと信じている者はみな、だれでも、神によって生まれているとしているのです。

私たちカルバリーチャペルの聖書理解では、教会は、キリストの空中再臨によって引き上げられ、大患難を通らないと信じています。けれども、大患難を通って、地上再臨の時に主に初めてお会いするとする考えもあります。後者を信じている人たちとも、全く問題なく兄弟として交わることができます。聖霊の働きが、異言や預言など、使徒の時代における一時的なものであり、今はそれは廃れたと考える人々がいます。我々カルバリーチャペルは、今も有効であり、聖書にある規定にしたがい用いていくべきであると考えています。では、前者の人たちはキリストのものではないのでしょうか？いいえ、同じ兄弟たちです。ただし、イエスが神の御子キリストではない、彼は大天使であるとか、復活はしなかったとか、そういったことを言っている人たちはどうでしょうか？これは、福音の根幹、イエスがペテロの告白を聞いて、この上にわたしの教会を建てると言われた告白、「イエスが神の子キリスト」を否定するならば、その人は神からのものではありません。反キリストです。救いに関わる教えについては、妥協してはなりませんが、そうでなければ教義の違いに関わらず、同じ兄弟なのです。

2B　神への愛　2

2 このことから分かるように、神を愛し、その命令を守るときはいつでも、私たちは神の子どもたちを愛するのです。

神を愛するので、その命令を守ること。これはキリスト者としての大義とも言えますね。「マル 12:29 イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。30 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』」力を尽くして主なる神を愛しますが、それと共に、神からの命令として、兄弟を、同じ神から生まれた者たちを愛するのです。イエス様は最も大切な教えとして、第二の戒めを語られました。「12:31 第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」」この二つをイエス様は分けて語らずに、最も重要な命令として教えられました。

ですから、神を愛して、命令を守る時は、いつも、自分と信仰を同じくする神の子どもたちも愛するのです。神を愛して、それで他の神の子どもたちを愛さないということはないのだ、ということを、「いつでも」という言葉で強調していますね。切っても切り離せない二つの命令なのです。双方向にあるでしょう。神の子どもを愛さないといけないと言いながら、その兄弟が犯している罪を是認したらどうでしょうか？「ロマ 12:9-10 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないよ

うにしなさい。10 兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。」悪を憎むこと、善から離れないことが愛しているということになければ、その愛は偽りです。そして、神を愛しているといって、兄弟を憎むようなことを行ったら、

2A 重荷とはならない命令 3

3a 神の命令を守ること、それが、神を愛することです。

神を愛することについて、それが一体どういうことなんか？と思うかもしれません。感情的に神を愛しているということでしょうか？そうではないですね。4 章 19 節で、「神がまず私たちを愛してくださった」とあり、それに応答することが、私たちの神への愛だと知りました。その前に、9-10 節で、御子が来られて、私たちのための罪のために死なれ、よみがえったところに愛が現れているというのも見ました。これらに対して応答するのが神への愛です。そして、具体的には、神の命令を守ることによって愛するのです。愛している方、主の言われることを行いたいと願うはずです。もし、愛されていることだけで、イエス様の命じることは聞きませんという態度の人がいるなら、その人は初めに、愛されたということさえ知らないのかもしれません。神の愛によって愛されたら、愛し、命令を守りたいと願うはずだからです。「ヨハ 14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。」その人が本当にイエス様を愛しているかどうかを知るのは、その命令を守っているかどうかで分かります。

3b 神の命令は重荷とはなりません。

ここは大事な御言葉です。「神の命令」と聞けば重くなるものと思ってしまいます。自分の能力や知恵では守ることができないと感じるからです。けれども、「重荷とはなりません」と言っているんですね。イエス様が弟子たちに語られた、有名な言葉があります。「マタ 11:28-30 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」イエス様の与えられるくびき、教えは負いやすいのです。荷は軽いのです。

したがって、もし重荷を感じているのであれば、それは主からのものではない可能性があります。主の命じられている以上に、自分自身に荷を負わせていることもあるのです。主のもとに来て、安らぎを得ることの必要性がありますね。それに対して、パリサイ派と律法学者についてイエス様は言われました。「マタ 23:4 また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。」主の命令は、私たちの想像するような戒め、パリサイ派や律法学者の教えているようなものとは異なるものであることがわかります。

イエス様が語られている命令と、そうでない律法学者らの語っている教えには、大きな違いがあります。この方には命令している相手を、こよなく愛されているという愛があります。愛があるので、人を変えます。人が変わるので、その新たにされた思いと心で、主に仕えます。従うという動機が、恐れではなく愛であり、愛には、自分自身を捨てる力を持ちます。パウロは、こう言いました。「Ⅱコリ 5:14 というのは、キリストの愛が私たちを捕らえているからです。私たちはこう考えました。一人の人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである、と。」自分がキリストの愛に捕らえられている、と。それゆえ、あれだけの苦しみにあいながらも、なおのこと主の命令に従っていたのです。

もう一つは、「イエスの命令には、それに従うことのできる権威と力がある」ということです。この方が命じると、それに従おうとする人が、たちまち力が与えられることを覚えているでしょうか？足なえの人が、立ち上がりなさいと言われたら、立ち上がりましたね。悪霊に出て行けと命じられたら、出て行きます。主が命じられる時に、そこには力があり、権威があるのです。だから、従おうと思う者たちには、聖霊の力によって従う力が与えられるのです。

ですから、ここで大事なのは、この方を信じるということ、そして自分を捨てるということです。この方に信頼して、自分のあり方、自分の考えを捨てるということです。ペテロが、夜通し、漁をしたのに一匹もとれなかったのに、主に網を下ろしなさいと命じられて、「おことばだから」下ろしたということ。自分の考えていること、強く思っていることとは正反対であっても、それでも従うのです。それで、初めてイエス様がその従順に力を与え、それに従うことができるようにされます。ですから、しているのはイエスご自身であり、自分ではないのです。この方を信じる信仰によってこそ、勝利することができます。次回は、その世に打ち勝つ信仰について学びます。